

『東京センチネルバース -摩天楼の山狗-』

著：鴫 六連

ill：羽純ハナ

二日目の研修を終えた、二十二時——。

個室で食事と風呂を済ませた真幌は、ソファに足を伸ばして座り、タブレットを操作していた。兎は広い室内を探検したりカーペットを掘ったりしている。

夕食前に法務室へ来るよう告げられ、そこで弁護士から報告を受けた。

‘Biotopε、のオーナーは一昨日ニュースで事件を知り、真幌が出勤しないことからマンションへ確認に向かい、被害に遭ったと把握した。それ以上の確かな情報が得られず困り果てていたが、昨日の朝、美容室を訪ねてきた弁護士から説明を聞き、診断書を受け取って、ひとまずは安堵できたという。

『怪我がなくて本当に安心しました。恐ろしい極限状態の中、小泉君は自分の身を守る判断ができたのだと思います。今は心身を休めることに専念してください。小泉君の回復をスタッフ全員が願っています。いつになっても大丈夫です。連絡を待っています』

オーナーからの伝言に、真幌は人目を憚らず泣いた。そして ‘Biotopε、へ戻るためにP C Bの研修を受けるのだと、あらためて気持ちを強くした。

支給された最新モデルのタブレットは、インターネットはつながるがメールやメッセージ機能はいっさい使えない。文字入力ができるのは検索バーのみで、S N Sも閲覧は可能だが書き込めない。紙とペンの支給もなく、情報漏洩防止が徹底されている。

強盗犯の逮捕はネットニュースで確認できた。犯人たちは真幌の家に侵入する前に、ほかのマンションでも窃盗を犯していたという。白慈が佗助より遅く来たのは、そちらの現場にいたからのようだった。

警察の検証は何日つづくのだろう。段ボール箱だらけの新居が気にかかるが、一週間後には様子を見に行くことができると、今は信じるしかない。

真幌はタブレットのアイコンをタップし、タワーのフロアマップを開いた。

「高さ二百五十四メートル、五十一階建て。高いな、中央区にこんなビルあったっけ……」

主要な階のみ、名称が表示される。真幌が最初に過ごした白い部屋は四十二階、ワードローブ室は三十四階。研修を受けている三十階は多目的な部屋ばかりで【M・F】という略称があった。四十四階から四十六階にかけてはメディカル室、五十階と五十一階は空中庭園になっている。

局長室と ‘イリミネイト、の表示はない。

私学と私塾、トレーニングルーム、カフェ、美容室、コンビニエンスストア——階が下がるに

つれて一般的になる印象がある。低層階に入居している電力会社や製薬会社、不動産会社やホテル運営会社は、すべてPCB東京のために存在すると聞いた。

「小さな町が、ひとつのビルに入ってるみたいだ……」

そして真幌が閉口してしまうのは、待遇が過度に良いことだった。

箔押し of 紙箱に入った歯ブラシセットから始まり、手が込んだ料理の数々、洒落た家具、ファッション性の高い制服まで、あらゆるものに金をかけすぎている。個室として用意されたこの部屋も、ランクの高いデザイナーズホテルのようで落ち着かない。居住フロアにはコンシェルジュまで常駐している。

タワーの高層階を出入りできるのが異能者だけなら、弁護士や調理師たち、総務室の笹山も、先ほど挨拶を交わしたコンシェルジュも、センチネルかガイドということになる。PCBで普通に働いているのが不思議でならなかった。それとも今の真幌のように、皆かつては不信や葛藤を抱いていたのだろうか。

フロアマップの下部に視線を移す。地下二階に【駐車場・搬入口】、地下三階と四階には【機械室】の表示があった。真幌は口角を下げ、まぶたを半開きにする。

「怪しいな。ほんとに機械室？ 巨大地下都市とか造ってんじゃないの。美馬局長、やりそうな雰囲気ある……」

公開されている情報を鵜呑みにするのは危険だと思う。難しいけれど、PCBに関する事柄は些細なことも含め、信用できるか否かを見極めていく。そう決めてマップを閉じようとしたとき、四十三階の【Bonding room】という文字が目にとまった。

「見落としてた。なんて読むんだろ……ボンディングルーム？」

今日は案内されなかったが、どこかで聞いたと記憶を辿り、思い出した。

PCBで目覚めて那雲に注射を打たれ、連れて行かれた局長室。そこで柴田が白慈に言っていた。

『どうせボンディングルームで惰眠を貪っていたんだろが』

『無駄に吠えんなよ土佐犬のおっさん。ぶっ殺されてえのか？』

あのときは白慈の気性の荒さに驚くばかりで、ほかは気にする余裕がなかった。

白慈はこのボンディングルームという部屋でよく眠るのだろうか。名称が表示されているから、イリミネイト、フロアと違って秘匿性は高くない。後日教わるだろうと思いながらフロアマップを閉じた。

つづいて【沿革】のアプリケーションを起動させる。

PCBの組織変遷については、昨日の研修初日、氏家が相当な熱を入れて長く語ってくれたが、真幌はほとんど覚えていなかった。氏家は抜き打ちテストのように質問してきそうな気がするので、復習しておく。

Psychics Conservation Bureau Tokyo——異能者保全局・東京局、は、警察庁の外郭組織だ。当然、非公式かつ非公開。驚くことに、その歴史は百五十年近く前の明治時代までさかのぼる。

超常的な力を扱う者は、巫女や陰陽師、武士や忍者など、時代により姿を変えて存在してき

た。約一年半にわたる戊辰戦争でも多くの異能者が各地で暗躍した。明治七年、警保寮設置の陰で、異能者たちが初めて一堂に会し、前身「警守幻隊」が発足する。しかし当時は世界的に大きな後れを取っていた。

戦後間もない昭和二十二年、警察法が制定されると同時に、警守幻隊は国際PCB機構に加入、組織名をPCB東京局と改称した。昭和二十九年、警察庁設立とともにその傘下となった。「……………」

インターネットに掲載された画像や動画を徹底的に削除し、世間に対して情報を遮断しているPCBだが、新たに覚醒した者には惜しみなく開示する。そして、公開されている情報の何倍もの機密があることは、簡単に想像がついた。

「佗ちゃんは十三歳のときにこれを全部知ったのか……………」

クッションにもたれかかり、少し天を仰いだ真幌は、離れていたあいだの佗助に思いを馳せる。

真幌に『必ず迎えにくる』と告げて、タワーに入った夜、きちんと眠れただろうか。研修は物凄く眠くなってつらかったと言っていた。『どこに住んでるか、わからない』と、何歳から思っているのだろう。私学では異能者同士、友人はできただろうか。

考えるほどに、一緒にいられなかったもどかしさが募る。

再会直後は混乱させられ、ひどく恥ずかしい思いをさせられて、苛立ってしまった瞬間が何度かあった。でも、一夜で環境が激変し、受け入れがたい非現実的なことが次々と起こる中で、真幌を導いてくれたのも佗助だった。

もし真幌だけが異能の力に目覚めていたら。

想像して、寒気がするほど怖くなった。

深夜、ふたりの男に侵入され、サバイバルナイフを振りかざされる。それは精神疾患を発症しても決しておかしくない恐慌体験だ。佗助ではなく見知らぬセンチネルにタワーへ連れて行かれ、一般人と関わることを禁止すると言われたら——きっと今もまだ、強盗犯に襲われた恐怖と、佗助との再会や日常生活を奪われた絶望から立ち直れていない。あの白い部屋に閉じ籠もったままだろう。

疑問や葛藤を抱えながらも、ソファでくつろいだりタブレットを操作したり、今こうして穏やかな時間を過ごせているのは、センチネルとなった佗助が真幌を守り助けてくれたからだ。

——佗ちゃん。どこにいるんだろう。昨夜どこで寝たのかな。

七年近くも我慢できたのに。

いつでも顔を見られるようになった途端、一日会わないだけで落ち着かなくなってしまった。

——毎日、会いに行くつもりだった。…………って、言ってなかった？

思い耽る真幌の胸に、兎がもふっと乗ってきて、「プッ、プン」と鳴いた。にっこり笑い、優しく撫でる。

「ウサさんも、いてくれてほんとによかった。ずっと助けられてるよ、ありがと」

兎は嬉しそうにモコモコの身体をぺたーんと伸ばし、可愛らしい口を動かした。言葉を操るこ

とはできないけれど、「わびちゃん、あいたいね」と言っているのがわかる。

「いや、ちがっ……うーん、今どこでなにしてるんだろ、って考えてるだけだよ。タワーの中にいそうな気もするけど。探しに行こうかな、でも復習しなきゃ……」

なぜか焦ってしまい、ぶつぶつ言って「沿革」のアプリケーションを閉じた。

ノート機能のアイコンをタップして開き、自身で打ち込んだメモを小声で読む。氏家と橘から教わったセンチネルについて——佗助について、気がかりなことがあった。

「異能の力が強いほど精神的に脆く、五感が暴走しやすく、ゾーン落ちしやすいという厄介な性質を持っている。『ゾーン落ち』とは、センチネルが克服し得ない唯一最大の弱点。能力の酷使によって五感が暴走し、痙攣や錯乱、野生化、昏睡状態に陥る。ガイドの適切な処置がなければ、……精神崩壊し、絶命、する」

説明を聞いたまま打ち込んだその内容は、非常に深刻で難しい。

超発達した五感と類稀な身体能力を持ちながらも、精神的な脆さから逃れられないセンチネルたち。最高位の9 Aである佗助は、常に大きな危険にさらされている。

「佗ちゃん……、大丈夫なの……」

ふいに山狗の気配を感じ、真幌はソファから足をおろして座り直した。そのあとすぐに、閉まっているドアを通り抜けて山狗が部屋に入ってきて、もう驚かなかった。

「佗ちゃん？ じゃない、狗さんだ」

ソファから離れたところで立ち止まった山狗に「おいでよ」と笑顔で話しかける。

「ごめんね。僕、混乱してて、狗さんにも嫌な態度を取ってしまった。思い出したんだ、あの夜、白慈くんがドアを蹴破って家に入ってきたときも、次の日の昼も、狗さんはぴったりくっついて僕を守ってくれたよね。ありがとう」

綺麗な銀の獣毛を撫でながら伝えると、山狗は目を糸みたいに細くして、長い尾をふあさふあさと振る。

「はは、物静かなところだけど、動きも佗ちゃんに似てるんだよなあ。まぶたをゆっくり閉じるところとか。——あれ、どうしたの……佗ちゃんが外にいる？」

急にまぶたをパチッと開けた山狗が金色の瞳で「来て」と伝えてくる。兎を頭に乗せ、入ってきたときと同じように出て行った。できないはずの兎まで通り抜けたことに驚きながら、真幌はドアを開けた。

居住フロアの廊下の照明は、時刻に合わせて色や明るさが変わる。食堂へ向かう朝は眩しい白色で、夕食をトレーに載せて個室へ戻ったときは淡いオレンジ色だった。

今は等間隔に並んだブラケットライトが小さく光るだけで、薄闇が漂う。

佗助が、廊下の角に立っていた。山狗は隣に座り、大きな手に撫でられた兎の被毛がぼわっと膨らむ。

胸が高鳴ったのは恐怖からではなかった。

黒いマウンテンパーカーと同色のカーゴパンツ。初めて見る色の制服に、青みを帯びた銀髪が映える。インナーのTシャツと、ブーツまで黒い。表情を崩さない端整な顔に眼鏡がよく似合っ

ていた。

会えた喜びと、安心と、言葉にあらわせない不思議な気持ちが混ざって、どきどきと胸が鳴る。怖いと思ったり怒ったりしているほうが簡単だった。そう考えながら近づいた真幌は、佗助の足許のリュックを見て言った。

「帰ってきたばかり？」

「いや。仕事へ行く」

「こんな遅い時間から？」

「時間は関係なくて、真夜中にも急に仕事が入るし、夜明けから始まることもある。今度の仕事は東京を離れる。二日ぐらいかかると思う」

「そうだった。一昨日、急に仕事が入るって教えてくれたね。ホテルに泊まるの？」

「PCBが経営してるホテルに、センチネル専用の部屋がある」

「すごいな、ほんとになんでもあるね……でもよかった、ちゃんと部屋で寝てよ、ビルの天辺とかで過ごしたりしないでさ。夜はまだ少し冷えるし」

「ん」

いつもの短い返事をした佗助が長躯を屈め、顔を近づけてくる。ほんのわずか上目遣いのようになる。

「かなり離れた場所へ行くから真幌が視えない、声も聴き取れない。それがいやだ。心配だ」

「ありがとう。でも大丈夫。佗ちゃんが言ってくれた通りみんな優しいし、困るようなことはもう起こらないと思うよ」

「二日も会えないから、ぎゅってしていい？」

「そ……っ、その」

その言いかたは、狡くないだろうか。物心がついたころから始まった佗助の『ぎゅってしていい？』を拒んだことは一度もなく、真幌のほうから抱きついたことも数えきれないほどある。それをわかっていて言うのは狡い。

金色の瞳から逃れたくて視線を逸らす。その先で、すでに山狗と兎は抱き合っていた。

「あっ……」

返事をするよりも先に佗助の両手が背にまわってきて、強く引き寄せられた。頬が制服に当たり、視界が黒一色になる。洗ったばかりのオリーブアッシュの髪に、佗助の唇が触れる。

「真幌」

痛いほど力が込められて、厚い胸板や腕の隆起を感じた。突き飛ばせばいいのに、恐怖も嫌悪もないから難しい。なにか話さなければ、早鐘のような心臓の音をまた聞かれてしまう。

「ボディ……を、組む、ガイドは……？」

「ガイドはいない。ひとりで仕事へ行く」

「えっ、なんで？」

思いがけない返事に、とっさにマウンテンパーカーをぎゅっと握った。

発達しすぎた五感の暴走、昏睡状態、精神崩壊、絶命——頭の中が、佗助を脅かす危険でいっ

ぱいになる。制服から頬を離し、金色の瞳を見上げた。

「なんでひとりなの？ 危ないんじゃないの？ ゾーン落ちていうのになっちゃったらどうするんだよ。絶対いやだ、今からでもガイドの人に頼めない？」

「ガイドはいらない。……おれはっ、真幌だけ」

「え？ 佗——」

ふたりの言葉が、同時に途切れる。長躯が前のめりに覆い被さり、薄い唇が迫って、噛みつくように口づけられた。

「んっ、う……！」

大きく背が反って仰向いた真幌の唇を、佗助が唇で押し潰す。抵抗する隙もなく、奥まで入ってきた肉厚の舌で口内をくちゅくちゅと掻きまわされた。

「あ……、んん、っ」

佗助は体勢を変え、顔の角度を変える。大きな手で真幌の後頭部を包むと、今度は下から押し上げるようなキスをした。濡れた唇を食み、舌先でなぞる。口の中へゆっくり差し込まれた舌の熱さと生々しさに、ぞくぞくと肌が震えた。

「まほろ……」

縋るような、ねだるような声で呼ばれ、感じたことのない甘い痺れが身体を駆け抜ける。

何度も唇を吸われ、舌で優しくあやされつづけて、立っていられなくなった。真幌は佗助の手に支えられながらずるずると座り込んだ。

「……は、……っ」

「おれはゾーン落ちしない。仕事を終わらせて真幌のところにまっすぐ帰ってくる。部屋に連れて行けなくて、ごめん。ベッドまで運びたいけど、また真幌が怖がることしてしまうから」

凄まじい衝動を懸命に抑えているのが、触れ合う指から伝わってくる。

真幌はひどく困惑した。なぜ、抱きしめられるのも強引なキスも嫌と感しないのだろう。

大きな手が離れていく。リュックをつかんで駆けだす佗助を、山狗が追う。寂しい兎は真幌にくっついてくる。言葉をかけたいのに、ままならない。真幌がガイドの能力を自在に操れたなら、佗助の仕事に同行できたのだろうか。

どうすればガイドの力が使えるようになるのだろうか——初めて思い浮かんだ自身の考えに戸惑いを覚えながら、獣身化した佗助が姿を消すまで見送った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>